人間の権利とは

上柴中学校2年
船木（ふなき） 万里奈（まりな）

人の権利――――。そう書いて〝人権〟と読みます。それは、『人が生きていく権利』などの意味がふくまれていると思います。

社会の中には、「女だから」「男だから」とか、「顔」や「体」のこと、「家のこと」など、そのようなことで差別されてしまうことがたくさんあります。民族や人種、家がらで、その人の運命が〝差別〟によって左右されてしまいます。そのような生まれたときの条件を理由に、他の人とちがったあつかいをすることを、『差別』といいます。だれもが、「自由、平等」「生命の大切さ」をきちんと理解し、考えていけば、こんな悲しいことはなくなると思います。

私が小学校中学年のころ、いっしょのクラスだったA君のことを「人権」と言われると思い出します。そのA君は手が不自由で、よく持てないようでした。クラスの中にはA君を少しさけている人もいて、私もその一人でした。それでも、そのA君には友達がいました。A君が重そうな荷物を一生けん命運ぼうとしてるとき、私はかかわるのがいやだったので、しらんぷりしてほかの荷物を持っていきました。そのときです。

「だいじょうぶか？いっしょに持ってやるよ。」

となりにいたB君が、A君に話しかけたのでした。「ありがとう。」その二人は、まえから知り合いだったようで、仲よく運んでいきました。今までA君に仲の良い友達がいるなんて知りませんでした。きっとA君は、B君に支えられていると思います。不自由な手のせいで、他の人より物事がよくできないときも、それを支えてくれる人がいるから、A君は前向きに生きているのだと思いました。

差別は、無関心をよそおったり、相手にできるだけわからないようにするような目立たないものから、仲間はずれやいじめなど、直接本人にかかわるもの、相手に危害をくわえるものまで、いろいろなかたちで、人と人との関係の上にあらわれています。いじめている人が、いじめられている人の立場になって考えたり、どんな気持ちでいるのか、あたまをかすめてもいいはずです。でも今現在、人の気持ちもよく考えないで、自分のことしか興味がない、そのような人が増えてきていると聞きます。A君にやさしく接していたB君。A君を他の人と変わらないあつかいをしていました。そのように、人は一人ひとり、平等に接していて、他人のことを大切にできるようになれば、この世からは『差別』『いじめ』はなくなると思います。

「人権の尊重」憲法にもありますが、私はこのことを、日常生活の一番基本的なルールであり、人間が人間らしく幸せに生きるための最低限のルールだと思います。

ある人が、ふざけ半分で人をいじめた。クラスのみんなから非難されるようになってしまった。これは確実に、人が自由に生きる権利をうばってしまっています。そうやってついやってしまったことで、人の心を深くきずつけてしまいます。私たちのまわりを見回してみると、女性、子ども、高齢者、障害者など、様々な人権問題があります。場合によっては、命までうばってしまうことになることもあります。

でも私は、「人権週間」なんていらないと思います。人権週間は「人の権利について考えましょう。」という期間ですが、いつも人権のことを頭に入れておけば、そんな必要はなくなります。人を大切にして、世の中にはこんな人がいる、こういう考え方がある、そのようなことを理解すれば、人と人との争いなどはなくなるはずです。でも、このような週間があるからこそ、より深く人権のことを考えられるのでしょうか。

武者と生まれて描く虹
～畠山重忠伝説～

⑨ 典雅の後裔

愛甲三郎季隆（すえたか）の放った矢が重忠の体を抉（えぐ）った後、他に数本の矢を体で受け止め、重忠は遂に絶命した。重忠の首は季隆によって北条義時（よしとき）のもとに運ばれたが、義時は溢（なが）れ出る涙で、この亡き友人の亡骸（なきがら）をはっきりと見ることができなかった。

畠山重忠は、典型的な武蔵武士として評価されている。しかし、武士道の中核を成す「倫理的な忠誠」の意識は当時は必ずしも高かったわけではない。中世期の主従関係は主君と郎党間の契約関係であり、奉公とは御恩の対価であるとする観念が強かった。こうした時代にあって、重忠は武勇、忠義、礼儀、実直、質素を旨とし質実剛健、清廉潔白で、しかも情けを心得ていた。その上、風流の道にも通じていたという、後の時代の武士の鑑であり、この時代にあっては稀（ゆう）有な存在だった。

重忠亡き後、承元四年（1210）五月、重忠の妻、いわゆる「重忠後家」の所領については、そのまま安堵（あんど）されることが認められている。この「後家」については、義時の妹と推定され、後に足利義兼（よしかね）の庶子・足利義純（よしずみ）に再嫁し、畠山氏の名跡を再興している。義純の子孫は「畠山」を称し、斯波（しば）家、細川家と共に室町幕府の三管領の一家として繁栄した。江戸時代には幕府における儀式や典礼を司る高家（こうけ）に列せられる程の名家となり、重忠の重んじた礼儀や典雅の心は遠く江戸期にまでも息づいていた。

国は武蔵の畠山
武者と生まれて描く虹
剛勇かおる重忠に
いざ鎌倉のときいたる

「重忠節」より

夢なかるべからず

映画を愛する熱血アニキ

強瀬 誠（こわせ まこと）さん

FIFF

ふかやインディーズ・フィルム・フェスティバル。

ここには各地からさまざまな想いが映画という形になって集まってくる。

打ち上げ会場には、祭典をやり遂げた安堵（あんど）の声と、自らの作品を世に送り出すことができた新米監督の喜ぶ声が響いている。その中に、誰よりもうれしそうに笑っている男がいる。

強瀬誠。彼に映画を好きになった瞬間（とき）の記憶はない。気が付いたときには映画に魅了されていたからだ。それ程に彼の日常は映画であふれている。

想いを受け止める

始まりは15本の作品だった。最初から順調だったわけではない。しかし、「映画を愛する人の後押しがしたい」という強瀬の想いは、年を追うごとに祭典を成長させた。そして、今では135本の作品が寄せられるまでになった。

FIFF 2005の集合写真

作品が集まってくる時季になると、普済寺の畑で野菜作りに汗を流しながらも、強瀬の頭の中は作品のことでいっぱいになる。

作品に真摯（しんし）に向かい合い、込められた想いを、ひとつひとつ大切に受け止める。この作品すべてに目を通す作業は、寝る間を惜しんで続けられていく。想像以上にきつい作業だ。

だが、「来年は今年よりもたくさんの作品がくるかもしれない…。想像するだけで怖いですよ。」と言う強瀬の顔からは喜びがあふれていた。

夢をあきらめない

誰もが一度は想い描く夢がある。俳優、映画監督…。また、はじめにあきらめてしまう夢も同じかもしれない。強瀬もそんな夢を見た一人だった。だからこそ、そんな夢を「叶えてあげたい！実現させたい！そのためにもFIFFの敷居は限りなく低くしたい」と強瀬は語る。

踏み台でいい、夢を追いかける人の背中を押したい、強瀬誠は「ふかやインディーズ・フィルム・フェスティバル」という夢の架け橋を創り続ける。

夢七訓（ゆめしちくん）
夢なき者は理想なし
理想なき者は信念なし
信念なき者は計画なし
計画なき者は実行なし
実行なき者は成果なし
成果なき者は幸福なし
ゆえに　幸福を求める者は
夢なかるべからず※

（本文中の敬称は本人の承諾を得て省略しています）

※渋澤栄一が残したとされる「夢七訓（ゆめしちくん）」より。「夢なかるべからず」は「夢を持たないといけません」という意味。